

○外部評価 総評（委員長・副委員長による総評）

2025 年 10 月 3 日に琵琶湖博物館協議会が開催され、第三次中長期基本計画における 6 つの事業計画について前年度の進捗と内部評価の結果が示された。今回評価対象となる令和 6 年度には、年間来館者数が 52 万人台と開館以来 3 番目の来館者数を達成し、累計来館者数も 1,300 万人を超えた。また、2023 年 2 月の水槽破損をうけて水族展示室再生のために実施したクラウドファンディングでは多くの支援が集まるなど、県内外の人々にひろく親しまれ、大切に思われている博物館であることを実感できる一年となった。6 つの事業目標について、協議会では多様な視点から意見や質問、提言を行い、今回も活発な質疑応答を繰り広げ、全体として中長期計画に基づいて積極的に事業に取り組み、成果を上げてきているという評価であった。今後は新たな発展を目指して、残る課題の改善を図りつつ博物館の今後のあり方を考えていくべき重要な局面にあるともいえる。なお協議会の意見の中で、館からの報告内容について、具体的でなくてわかりにくいという意見が各項についてあった。例えば「研究成果を世界に発信」ということは。内容は素晴らしいけれども、何を意味しているのか、ホームページで掲載することなのか、論文を学会誌に発表することなのか、それ以外に方法を考えているのかわかりにくい。目指した成果、あるいは効果が分かるように示していただければと感じる。

当日の質疑内容と内部評価をもとに各委員が行った外部評価を受けて、おもな目標について総合的意見を述べる。

1. 研究の活性化と研究成果をより広く共有する取組みに向けて

年報（2024 年度）の活動概要の冒頭には、琵琶湖博物館が研究活動を全ての博物館活動の基礎と位置づけ、その成果をもとに交流サービス、展示など 4 つの事業を展開していることが明記されている。とくに数年かけて進めてきた総合研究の成果は博物館活動を支える大きな柱となるので、企画展や図録、研究報告などにとどまらず、さまざまな媒体や活動を通して広く、また継続して研究成果を発信していく必要がある。また、今後を見据えて博物館で育ちつつある研究の種を着実に芽吹かせ、花開かせるためにも研究のブラッシュアップを図る仕組みを講じておくことも求められる。学芸員以外の特別研究員による研究と博物館事業への貢献も、評価しつつ、環境史、生態系、博物館学と 3 つの研究領域があるなかで、博物館学の成果が見えにくい状況にあるため、論文数などが目安となる研究成果のほかに、展示や日常的な博物館活動の成果を業績として評価できる仕組みも考えてい

く必要がある。

2. 標本・資料の収蔵状況の整備と機器類・設備の充実化に向けて

研究を進めるうえで基盤となるのが標本・資料の充実と機器や環境の整備だといえる。収蔵空間のLED化やIPM体制の更新など、資料保存の質の面では向上がみられたが、増加する資料を適切な環境で管理していけるのか、資料の数量に見合った体制の構築という点では収蔵棚増設が見送られるなど危惧される状況にあるのではないだろうか。また、研究の質を高めるうえで機器の更新や充実化は必須であるし、水槽破損に続く館内設備の事故を防ぐうえで施設修繕も順次進めていく必要がある。改めて資料収集・保管の長期方針と当面の計画を立てて財源確保も講じ、資金の調達を進める工夫がさらに求められる。

3. 館外連携の強化を博物館活動の充実につなげる取組み

従来からの課題のひとつであった「来館しやすい環境整備」については、館外連携により湖上交通の活用が図られ定期便の就航につながる事例があった。「フェスとも」や「はしかけ」に象徴されるような、熱心な利用者の活動が、より発展していくように、館からの計画に基づいたアドバイスが求められる。企業連携や学校・自治体との連携、国内外の博物館との連携を深めることにより、琵琶湖博物館の見守り手がさらに増えるだけでなく、博物館が抱えている課題の解決や設備環境の向上、博物館活動の広がり結びつく可能性もあるので、一層の取組みが必要である。琵琶湖の魅力と博物館の魅力の双方を今後とも着実に発信していくことが重要となる。